

//2018//

11月28日(水)

Daily Magazine



das SPORTS



発行日/2018年11月28日 (No.016)
編集・発行所/元氣das編集室
東京都港区芝公園1-6-7-6 ※内容に関する
問合せは0120-063711

ATHLETE TV



藤本怜央 Reo Fujimoto

「転んだ時に『大丈夫かな?』
と静まり返るんじゃなくて、
熱く応援して欲しい」



Illustration by Melnikoff

◎たばたいたる

五輪競技、競馬、野球を中心に活動。
最も感動した五輪名場面は
1976年モントリオールの男子体操団体の金メダル。

リオデジャネイロ・パラリンピックで興奮したのは、車いすラグビーの3位決定戦だ。日本が52対50の大接戦でカナダを破り、銅メダルを獲得した歴史的ゲーム。勝利の瞬間には、選手たちが抱き合っただけで号泣するシーンも見られ、個人的にパラスポーツをこれほど熱心に観戦したのも初めてだった。

ただし、これは車いすラグビーの話。車いすバスケットボールの試合をちゃんと見たことがあるかと聞かれれば、ない。せいぜい井上雄彦のマンガ『リアル』で、ちょっとだけ知っている程度です、すみませんというのが正直なところだ。

2017年の映画賞を総なめにした菅田将暉主演の映画『あゝ、荒野』にも、車いすバスケットが出てくる。刑務所から出所した主人公が、かつての詐欺仲間を訪ねていくと、暴行事件で下半身不随になった彼は今、車いすバスケットの選手として日々を送り、もう悪事から足を洗っていた。こうして主人公はボクシングの道へと向かっていく。

2004年公開の『ウィニング・パス』は車いすバスケットをメインに扱った映画だ。バイク事故で脊髄損傷した高校生の男の子が、自暴自棄になりながらも家族や友達に支えられ、そこで出会った車いすバスケットボールに夢中になっていく。

競技のルールも説明され、障がいの軽い4点プレーヤーと、障がいの重い1点プレーヤーにはそれぞれの役割があること、そのチームプレーが車いすバスケットの魅力であることなども語られる。主演は当時18歳の松山ケンイチ、妹役が15歳の堀北真希という、この配役だけでも見る価値のある映画だった。

これらの予習の後、今度は本物の車いすバスケットの試合を動画サイトで観戦してみた。

リオのパラ五輪、日本がオランダ相手に善戦しつつも最後に突き放された試合や、カナダ相手に初勝利をあげた試合など、攻守が一瞬で入れ替わるスピード感と、正確なシュートの数々、レイアップの技術など、さすがに本物は違う。そして常にその日本代表の中心にいたのが、藤本怜央選手だ。

藤本は2004年のアテネから2016年のリオまで、パラリンピック4大会連続出場。2020東京は36歳になるが、この大会を自身の集大成と位置づけ、「地元日本でメダルを取りなさいと神様がくれたチャンス」と意気込む。

ちなみに藤本が出場したパラ五輪の日本の順位は、アテネから順に8位、7位、9位、9位。東京でのメダル獲得は簡単な目標ではない。ただ、2018年の世界選手権では9位に終わったものの、欧州の強豪国に勝利するなど、世界との差は少しずつ詰まっている。パラ五輪のメダルは決して夢物語ではない。

そんな藤本怜央が発してきた言葉の中で、一番インパクトがあったのはこれだ。「日本では、転んだ時に『あ、大丈夫かな?』とシーンと静まり返ったり、起きたら拍手が起こったりする。そうじゃなくて、もっと熱く応援して欲しいなと思います」

パラスポーツを見る日本の観客への要望であり、不満を含んだ言葉でもある。ここにはトップアスリートとしてのプライドが感じられ、現在はドイツでプレーする藤本だから言える「日本パラ文化論」にもなっている。

選手同士が激しくぶつかり合う、車いすバスケットで転倒場面があるのは自然なこと。やさしく見守りすぎて、静まり返るような観戦態度は逆に選手に失礼かも知れず、ファイティング・スピリットをそぐことにもなりかねない。そう胸に留めたい。